周産期乳用牛における消化管ホルモン（グレリン）の分泌動態に関する調査

愛媛県畜産試験場

○枡井和恵、家木一

消化管組織から分泌され反すう動物においては摂食行動を亢進するとされるグレリンについて、周産期乳用牛における分泌動態を調査し、飼料摂取状況や血液成分との関係を検討した。調査は、ﾎﾙｽﾀｲﾝ種雌牛 7 頭について分娩予定日 14 日前から分娩後 60 日までの期間行った。調査の結果、TDN 充足率、血中ｸﾞﾙｺｰｽ濃度及び血中ｲﾝｽﾘﾝ濃度と血中ｸﾞﾚﾘﾝ濃度との間にそれぞれ有意な相関が認められた（$p<0.01$）。血中ｸﾞﾚﾘﾝ濃度の変化を経時的にみると、いずれの牛も分娩後 7 日目に特異なサージを示したが、そのサージの高さにはばらつきがみられた。そこで、分娩後 7 日目の血中ｸﾞﾚﾘﾝ濃度が高い牛（4 頭）と低い牛（3 頭）に分類すると、高ｸﾞﾚﾘﾝ牛群の分娩後 7 日目以降における TDN 摂取量が高く推移する傾向を示した（2～3 週目;$p<0.05$、4～5 週目;$p<0.10$）。以上のことから、分娩後 7 日目のｸﾞﾚﾘﾝ分泌サージが泌乳前期におけるエネルギー摂取量に影響する可能性が示唆された。

畜種：牛、分類：畜産技術